

『本読み会』年表

日時 (人数)	イベント名	作家	作品	作品紹介
2004年				
3/20～ 3/21	特別上演企画	エドワード・オールビー	『動物園物語』	男性2人芝居。舞台装置は公園のベンチのみ。1時間ほどの上演時間のうち半分は「ジェリーと犬の物語」と題される長い独白です。人とモノ、人とイヌ、人とヒト。孤独の宿命を背負う人間は、いかにして関係性＝愛を結ぶべきなのか。～エドワード・オールビー『動物園物語』～
//	//	ウィリアム・サローヤン	『おーい、教えてくれ』	田舎町の牢獄に囚えられた男が、世話役の少女をだまして何と脱走しようと試みるというお話。しかしそこはサローヤン、たった30分の会話の中に、人間の生が光り輝く瞬間を切り取っています。まぎれも無い傑作。
?	お花見			
4/24 5/1 (13人)	第一回	J・P・サルトル	『汚れた手』	現実主義者の革命家エドレルの元に、暗殺者として送り込まれた若者ユゴー。そしてその美しき妻。果てなく続く政治談議の中に、苦悩する人間の姿が描かれる。言葉を聴くことが出来る者に、引き金は引けぬのだ。「言葉」の劇。
5/29 6/5 (24人)	第二回	A・P・チャーホフ	『かもめ』	若者の恋、熟年の倦怠、老年の悲哀。満たされない人々の果てしないすれ違い。人生の全てを四幕の中に詰め込んだ、近代演劇を代表する「喜劇」。
6/12 (12人)	特別企画『かもめ』ビデオ鑑賞会	A・P・チャーホフ	『かもめ』	蜷川幸雄演出『かもめ』のビデオ上映会。
7/10 (10人)	第三回	ニール・サイモン	『カリフォルニア・スイート』	カリフォルニアのホテルの一室を舞台に、4組の客の人生の一場面をオムニバス形式で描いた作品。たくさん笑ってちょっぴり泣いて。喜劇作品で名が知られるニール・サイモンの洗練されたウェルメイド・プレイ。
8/6 8/20 (8人)	第四回	テネシー・ウィリアムズ	『ガラスの動物園』	夫に先立たれた母、足の不自由な娘、そして惨めな人生を厭う息子。それぞれに苛立ち、軋む家族は、幻想の中へ逃避する。それはガラス細工のように脆弱なユートピア。ウィリアムズの自伝的名作。
9/19 (11人)	第五回	アーサー・ミラー	『代価』	暗黒の木曜日で破産した男の遺した家具を、処分しようと集まった者たちの話。『セールスマンの死』『るつぼ』で知られるミラーは、「お金」という現実的なものをとても丁寧に描く作家です。結局、現実にこそドラマがあるのかもしれません。
9/26	特別上演企画	レナード・メルフィ	『フェリーボート』	男が女をナンパする、ただそれだけ。ただそれだけのはずなのに、思いもしなかった自分がひよいと顔を出す。現代という時代の中で、人間と人間が出会う瞬間を探求した作品。
11/21 (7人)	第六回	ウィリアム・シェイクスピア	『ロミオとジュリエット』	いわずと知れたラブストーリーの究極形。禁断の恋は、家族を捨て、親族を殺し、国家を巻き込んで走り抜ける。『ウエストサイドストーリー』も『タイタニック』も、この戯曲がなければ生まれえない。
2005年				
2/19 (13人)	第七回	井上ひさし	『数原検校』	「東北の片田舎に生まれた盲の少年が、晴眼者に伍して生きて行こうとしたとき、彼の武器はなにか？—悪事以外にない！」検校の位にまで登りつめた悪人・杉の市の痛快一代記。演劇の魅力を存分に詰め込んだ、世界に誇る大傑作。
3/18～ 3/20	特別上演企画	井上ひさし	『数原検校』	
5/7 (13人)	第八回	別役実	『マッチ売りの少女』	寒い夜。夫婦がお茶の支度をしているところへ現れる女。夫婦は女をお茶に誘う。しかし女は言う。「私はあなた方の娘です」。第13回岸田國士戯曲賞受賞作品。
6/25 (16人)	第九回	野田秀樹	『TABOO』	舞台は南北朝の動亂の世。天皇の子に産まれ、「バカ」として育てられた主人公・一休は、やがて芸事の道に極めていく。多彩な言葉遊びで、言葉が音であることを思い出させてくれる、豊かな戯曲。
8/23 (9人)	第十回	ソフォクレス	『オイディプス王』	テーバイを治めるオイディプス王。先王を殺した犯人を突き止め追放しようとする中、彼は自分自身の呪われた運命に直面する。アリストテレスがこの戯曲の中に理想を求めた「悲劇」の祖。
10/8 (20人)	特別企画講演会『松下裕氏、チャーホフを大いに語る』			講師：松下裕氏（翻訳家）
11/26 (8人)	第十一回	ジャン・ジロドゥ	『アンフィトリオン38』	ギリシャ古典劇に登場するアンフィトリオン。「これまでの演劇史の中で何度も何度も翻案されているから、きっとこれは38作目くらいだろう。」ジロドゥのユーモア溢れるタイトルです。人間くさい神々と、神々しい人間の対比。
11/27 (11人)	特別企画『ワークショップ』			講師：イクバル・カーン氏（英国の演出家、俳優）
12/17 (18人)	『忘本会！2005』			

当時明治大学に在籍していた主宰二人が、仲間たち数人と企画した上演企画。この上演企画の最中に『本読み会』の構想を練り始めました。

第一回目は言い出しっぺの大野の好きな戯曲をやるとうことで、この戯曲を選んだのですが、それが失敗でした（笑）。慣れない進行と延々と続く政治談議に居眠りする参加者まで出る始末。前途多難な船出でした。

当時はNHK衛星第二で舞台中継が定期的に放送されていたんですねー。扇田昭彦さんが解説で、この蜷川演出の『かもめ』は、その放送を録画したもので、何度も繰り返し見ていました。VHSの時代だったので、上映会の際はそれはもうひどい画質に。

日本では出版も少なく、あまり知られていない作家です。蜷川幸雄さんが現代人劇場時代に使用した上演台本のコピーを貰い、上演できました。手書きの台本には石橋蓮司さんらの名前も。当時の熱気が伝わってきました。

実家の父親の本棚の中から盗み出したのが井上戯曲との出会いでした。この作品はとにかく面白くて、井上戯曲の中では最もお気に入りです。

『本読み会』が扱った一番新しい戯曲です。

とあるご縁で、チャーホフの翻訳で知られる松下裕さんに講演をしていただきました。この講演で、チャーホフがイクメンだということに気づきました。

講師：イクバル・カーン氏（英国の演出家、俳優）
このワークショップは本当に面白かった！イギリスの演出家は稽古で何かを伝えようと思った時に、ものすごい数の引き出しを持っているんだな、と感じました。この日身体で感じた『桜の園』ロバーヒンの興奮は、今もまだ覚えています。

日時 (人数)	イベント名	作家	作品	作品紹介
2006年				
1/14 (18人)	特別企画『スタニエフスキ講演会』聴講会			主催：ポーランド大使館
1/21 (11人)	第十二回	ウィリアム・シェイクスピア	『十二夜』	嵐で引き裂かれた双子の兄妹。男装して恋する男性に対する女。勘違い。すれ違い。複雑に絡み合うプロットが、シェイクスピア円熟の傑作喜劇を作り出した。
1/23 (12人)	特別企画『ワークショップ2』			講師：イクバル・カーン氏（英国の演出家、俳優）
4/22 (14人)	第十三回	岸田國士	『ぶらんこ』 『沢氏の二人娘』	さりげない日常の会話なのに、この時間はこの人物にとって一生忘れられない時間になるのだろう、そう感じさせる何かが、日本の劇作の父・岸田國士の書く戯曲には込められています。それぞれ短編、中編の名作。
5/28 (12人)	特別企画『演技部：自分の身体を知る』			
8/19 (14人)	第十四回	加藤道夫	『なよたけ』	世にも美しいなよたけを腕に抱くために、物語を完成させる石ノ上ノ文磨呂という青年。これは『竹取物語』が生まれるまでの物語。戯曲を流れる美しい日本語が、加藤道夫の静謐な筆を映し出す。
9/24 (5人)	特別企画『演技部：丹田』			
10/8 (8人)	第十五回	安部公房	『愛の眼鏡は色ガラス』	精神病院を舞台に、正気と狂気、条理と不条理の境を問いかける野心作。寺山修司が演劇の外から現実を破壊しようとしたならば、彼は演劇の内ですれをやるうとしたのかも知れません。グラグラしたい人は、是非。
10/22 (3人)	特別企画『演技部：アクションング』			
11/19 (7人)	第十六回	三島由紀夫	『弱法師』	家庭裁判所の一室。盲目の俊徳の親権をめくって両家対立する。傲慢で冷徹な俊徳は、調停委員の級子を前に、「この世の終わりの景色」を語りだす。「僕ってね・・・、どうしてだか、誰からも愛されるんだよ」
12/9 (13人)	『忘本会！2006』			
2007年				
1/28 (8人)	第十七回	ウィリアム・シェイクスピア	『テンペスト』	嵐に襲われ絶海の孤島に漂着したナポリ王の一行。実はその嵐は孤島の主プロスペローの魔法によるものだった。妖精のいたずらに若者の恋。円熟のシェイクスピアが書き上げたロマンス劇の傑作。
4/14 (13人)	第十八回	木下順二	『オットーと呼ばれる日本人』	20世紀最大のスパイ事件「ゾルゲ事件」を劇化。生か死か、家族か世界か、個人か国家か。多重に交錯する二律背反の中に、木下順二が戦後日本を描き出す。
5/27 (8人)	第十九回	ヘンリック・イブセン	『ヘッグ・ガーブレル』	気位高く、傲慢で、純粋。情熱的で、臆病な、美貌の女ヘッグ。矛盾を体現するような彼女の魅力は、世界中の女優を今なお魅了し続ける。性差や時代と言ったテーマを超え、神にはなり得ない人間の業を描いた近代戯曲の金字塔。
7/7 (9人)	第二十回	寺山修司	『犬神』	「犬から生まれた子」と村で噂される月雄。老婆と二人っきりで暮らす月雄のもとへ、迷い込んで来る老犬。異常な愛情を注ぐ月雄。彼に流れる「犬の血」が、村と家族に奇妙な悲劇を呼び込む。寺山修司初期の傑作。
9/1～ 9/5 (10人)	特別企画『ワークショップ：メソードによる俳優の心身のメインテナンス』			講師：平井愛子氏（京都造形芸術大学准教授・演技トレーナー）
9/23 (9人)	第二十一回	モリエール	『ドン・ジュアン』	「おれが信じるのは、な、二に二を足せば四になる、四に四を足せば八になる、これさ」徹底した無神論者で、女を口説き落とすことしか頭にない快楽主義者ドン・ジュアン。欲望と快楽を追求する彼の中に、人類の業が垣間見える。モリエールの傑作喜劇。
12/1 (9人)	第二十二回	サマセット・モーム	『ひとめぐり』	青年とその妻。青年は何十年ぶりに母親に会う。母はかつて青年を捨てて『駆け落ちした過去を持つ。世代をひとめぐりして、若夫婦は同じ過ちをくり返す。ロンドン演劇界を席巻したモームのウェル・メイド・ブレイ。
12/1 (12人)	『忘本会！2007』			
2008年				
2/2 (8人)	第二十三回	ウィリアム・シェイクスピア	『夏の夜の夢』	妖精バックの使った惚れ薬が、森を彷徨う恋人たちや芝居の稽古をする職人たちを巻き込んで、思いもよらない騒動を引き起こす。ハチャメチャな混乱から幸福感に包まれる大団円まで、まさに夢を見ているかのよう。シェイクスピアの魅力が詰まった大傑作。

何人かで講演会を聞きにいきました。大使館なんて入ったのは後にも先にもこの時だけです。

前回のワークショップがあまりに面白かったので、リクエストしてもう一度開催しました。参加者は事前にセリフを入れてきて、チェーホフ『かもめ』の4幕、カードゲームのシーンを作りました。イッキー曰く、「チェーホフはうるさい芝居なんだ」。納得。

初の試みとして、全体を二班に分けて、それぞれ別の作品を読みました。また、ここからしばらく「日本作家シリーズ」として、日本人作家を続けて読んでいます。進行の仕方など、試行錯誤していた時期でした。

私の大好きな作家です。

読むだけでなく動こう、というワークショップ企画。この後何回か開催しました。いろいろやっていました。

ほとんど毎年、年始はシェイクスピアを読んでいます。

こちらもとあるご縁で実現したワークショップ。本場仕込みのメソード演技。楽しい時間を過ごしました。

日時 (人数)	イベント名	作家	作品	作品紹介
3/22 (3人)	第二十四回	三好十郎	『好日』	主人公は貧しい暮らしを送る劇作家「三好」。自らとその周囲の人々の生活を生々しく、そして滑稽に描いた三好戯曲の一つの完成形とも言える作品ですが、発表されたのは作者の死後のことでした。『浮標』『胎内』『炎の人ゴッホ』などで知られる三好十郎の「私戯曲」の傑作。
3/30 (8人)	お花見			
6/21 (11人)	第二十五回	ゴゴリ	『査察官』	ベテルブルグから査察官がやってくる！慌てふためく田舎の名士たちと、そこにたまたま現れた大法螺吹き。面白可笑しい喜劇を書き上げたつもりが、意図せぬ痛烈な官僚風刺に論争が巻き起こり、ゴゴリは国外に逃げ出したとか。『検察官』という名でも知られる代表作。
8/13～ 8/14 (5人)	特別企画『ワークショップ：メソードによる俳優の心身のメンテナンス2』			講師：平井愛子氏（京都造形芸術大学准教授・演技トレーナー）
8/23 (6人)	第二十六回	ハロルド・ピンター	『帰郷』	北部ロンドンの古い家。アメリカで大学教授となった息子が妻を連れて実家へ帰省する。家庭を静かに不気味に侵蝕する狂気。この戯曲は、読み手に「信じる」とはたして何なのかを問いかける。
11/27 (7人)	第二十七回	ピーター・シェファー	『エクウス』	「何をしたい、その少年は…」精神科医の元に連れて来られたのは、六頭の馬の目をつぶした少年だった。何が正常で、何が異常なのか。病んでいるのは少年か、それとも社会なのか。『アマテウス』で有名なシェファーの代表作。
2009年				
1/29 (5人)	第二十八回	ウィリアム・シェイクスピア	『ジュリアス・シーザー』	ローマ帝国に君臨する皇帝シーザーの盛衰と、権謀術数うごめく政治家たちの人間ドラマ。『半沢直樹』を400年先取り。「ブルータス、お前もか！」の台詞はあまりにも有名。
3/30 (8人)	お花見			
4/28 (6人)	第二十九回	福田恒在	『キティ台風』	シェイクスピアの翻訳で知られる福田恒在は、また優れた劇作家でもありました。チャーホフ『桜の園』を下敷き、資産家の邸宅に集まった人々と、台風に煽られるようにして晒されていく彼らの秘密を描いた四幕の喜劇。
10/14 (6人)	第三十回	ジョン・オズボーン	『怒りを込めてふりかえれ』	歴史上、労働者階級が初めて主役に躍り出た記念碑的戯曲。劇中で描かれる「怒れる若者たち」の姿は社会現象にまで発展した。実は『本読み会』誕生の契機となった名作でもあります。
12/17 (5人)	『忘本会！2009』			
2010年				
？ (?人)	お花見			
8/23 (8人)	第三十一回	つかこうへい	『熱海殺人事件ザ・ロンゲスト・スプリング』	時代を映し、いくつものバージョンが生み出されてきた『熱海殺人事件』。その決定版と銘打たれた作品です。殺意とは何か。愛とは何か。その真実を描くには、ロジックは邪魔になる。「動機なんか豚に食われる！」
？ (?人)	『忘本会！2010』			
2011年				
2/20 (6人)	第三十二回	フェデリコ・ガルシア・ロルカ	『血の婚礼』	スペイン・アンダルシア地方で執り行われる結婚式。新郎と新婦、そしてかつての恋人。駆け落ちの末に男と女が遂げる非業の死は、ロルカの言葉によって詩へ昇華する。
3/26～ 4/1	特別企画英国観劇旅行			<ul style="list-style-type: none"> ・『リア王』@スワン劇場（ストラットフォード・アポン・エイヴオン） ・『子供の時間』@コメディ劇場 ・『エドワード・フォックス』@リバーサイド・スタジオ ・『オペラ座の怪人』@ハー・マジスティーズ劇場 ・『埋められた子供』@デューク・オブ・ヨーク劇場
5/8～ 5/9	特別上演企画	ハロルド・ピンター	『ダムウェイター』	地下室で仕事の合図を待つ謎めいた男二人に、姿の見えない階上の何者かから入る料理のオーダー。この芝居の主役は、もしかしたらダム・ウェイター（料理用エレベーター／黙ったままのウェイター）なのかも知れません。底知れぬ恐怖を感じさせる傑作。
2012年				
1/15 (9人)	第三十三回	ウィリアム・シェイクスピア	『マクベス』	「きれいはいきたくない、きたないはきれい」。3人の魔女から王になるという予言を受けたマクベスは、妻と共に血塗られた道を歩み出す。今も上演の絶えない、劇詩人シェイクスピア四大悲劇の一作。
2/11	『本読み会』ホームページ誕生			

松山も参加できず、参加者がなんと男性ばかり3名！本当に人が集まらない会でした。しかし、この回、これまででも5本の指に入るのではという程、楽しめた回でした。「戯曲さえ良いものを選べば、絶対に楽しむことができる。」この回を経験したおかげで、人が集まらないのが苦にならなくなりました。まあ、それともうかと思いますが。

二度目のメソードワークショップ。こちらも非常に楽しめました。

この回から第30回まで、松山がイギリス留学に行っていて不在でした。イギリス演劇シリーズと銘打って、いくつか読んでいます（福田恒在が挟まっていますが…）。

主宰二人でイギリスに行き、芝居を観て回りました。震災の直後だったので、日本から避難する外国人で飛行機はいっぱいでした。RSCの『リア王』の感動や『埋められた子供』での現地の方との出会いは忘れられません。演劇とはいかなる行為なのか、いろいろ考えさせられた旅になりました。

『本読み会』のホームページが誕生しました。予想以上に反響があり、毎回新しい出会いがある一方で、常連参加者もどんどん増えてきて、参加者集めに苦労するということがなくなりました。戯曲読みたい人が結構いたということ以上に、インターネットの力に心底驚いた次第です。

日時 (人数)	イベント名	作家	作品	作品紹介
3/29~ 4/1	特別上演企画	フェルナンド・アラバール	『建築家とアッシリアの皇帝』	アッシリアの皇帝を名乗る一人の男と、彼に建築家に任命されたもう一人の男。とある島で繰り広げられる二人のごっこ遊びは、孤独と愛の行為でもあった。粗野で下品で、切なく哀しい物語。
3/30 (27人)	第三十四回	フェルナンド・アラバール	『戦場のピクニック』	舞台は戦場。鉄条網が張り巡らされ、爆撃音が鳴り響く中、一人の兵士が腹這いになって現れる。静寂。兵士は起き上がり、毛糸玉と編み針でセーターを編み出す。それがアラバール不条理劇にぼっかり空いた地獄の入り口。
5/20 (15人)	第三十五回	清水邦夫	『狂人なおもて往生をとぐ一昔、僕達は愛した一』	娼家に集う人々が始めた家族ゲーム。しかしいつしかそのゲームは狂気を帯びた家族の姿を浮かび上がらせて……。人々の狂気と幻想を可視化する、清水邦夫の傑作戯曲。
7/15 (13人)	第三十六回	ベルトルト・ブレヒト	『ゼチュアンの善人』	ブレヒトが中国の四川（ゼチュアン）を舞台に描く大人の寓話。ひとりの人間の中には、善人と悪人が同居しており、互いが互いを補完し合うように生きざるを得ない人間の業。
9/16 (11人)	第三十七回	ウィリアム・ソーヤン	『わが心高原に』	小説でもその名を知られるソーヤンの処女戯曲にして代表作。貧しい暮らしをしている詩人とその息子、彼らのもとに現れたシェイクスピア俳優を名乗る老人の交流を描いた、美しく、詩に溢れた物語。演劇史に燦然と輝く傑作です。
11/25 (13人)	第三十八回	泉鏡花	『夜叉ヶ池』	夜叉ヶ池を舞台に、人間と物の怪の対立は、次第に人間と人間の対立へと忍び寄る。戯曲を読むものは耽美な言葉に酔いしれ、舞台を観るものは甘美な装束に陶酔する。

主宰二人出演の二人芝居です。演出など拙いものでしたが、とても高い評価をいただきました。ハブニングに見舞われた初日が特に高評価だったのが印象深いです。

アラバール上演企画と連動し、上演劇場で開催しました。参加者が一番多かった回です。

2013年

1/19 (7人)	第三十九回	A・P・チェーホフ	『熊』『結婚申し込み』	四大喜劇ばかりがチェーホフじゃない！恋と喧嘩で作られているような滑稽で愛らしい人間の姿を、バカバカしいドタバタの中に閉じ込めた傑作の数々。チェーホフの天才を結晶化したような短編戯曲です。
3/10 (8人)	第四十回	サム・シェパード	『埋められた子供』	アメリカ中西部を舞台にした家族劇。狂気か正気か、生きているのか死んでいるのか、その狭間から悪夢が湧き出す。シェパードのピューリッツァ賞受賞作。
4/28 (7人)	第四十一回	ヨハン・アウグスト・ストリンドベリ	『幽霊ソナタ』	余りの気難しさに40日間に6人の召使いが逃げ出したという孤独な生活の中、皮膚病のため文字通り手から血を流しながら書かれたという作品。疑心暗鬼と理想がきらめくストリンドベリの世界に、あなたも逃げ出したくなるかもしれません。
6/30 (8人)	第四十二回	ソーントン・ワイルダー	『わが町』	世界一有名なト書き「このお芝居の題名は、『わが町』」。何も無い舞台に人生のすべてを描き出し、演劇の有り様に革命を巻き起こしたワイルダー。
9/15 (5人)	第四十三回	エウリピデス	『メディア』	父を裏切り弟を殺し、全てを捨てて愛する男に尽くしてきた女王メディア。しかし最愛の夫に捨てられた時、彼女の愛は恐ろしいまでの怒りと憎しみに変わる。自分の生き方を決断していく人間の意志の力は、今も昔も、劇的です。
11/24 (16人)	第四十四回	唐十郎	『少女仮面』	宝塚歌劇団のスター女優に憧れる少女が、「肉体」という妙な名の喫茶店を訪れることから始まる奇想天外な物語。岸田國士戯曲賞を受賞した唐十郎の代表作。

2014年

1/26 (12人)	第四十五回	ウィリアム・シェイクスピア	『お気に召すまま』	「恋とは溜め息と涙で、忠実な心と献身で、気まぐれな空想でできてるものだ」。シェイクスピア作品の中でも群を抜いて生き生きと息づく登場人物たち。滑稽な、けれども真摯で美しい彼らの恋の花が、アーデンの森に咲き乱れます。
3/16 (8人)	第四十六回	ユージン・オニール	『すべて神の子には翼がある』	白人のエラと黒人のジム。少年時代から17年に渡る関係の中で、人種の違いは刻一刻と二人に影を落とす。オニールの筆は人間同士のドラマを越え、神と人間の関係をえぐり出す。
5/25 (9人)	第四十七回	ノエル・カワード	『陽気な幽霊』	本国イギリスでは演出家・喜劇作家・喜劇俳優としてその名を歴史に残すノエル・カワード。第一次世界大戦の真っただ中、彼が書いたのはインチキ霊媒師と幽霊が巻き起こすドタバタコメディでした。演劇は芸術じゃない、芸能だ。そう思わせてくれる作品。
6/29 (9人)	第四十八回	岡本綺堂	『修善寺物語』	これぞ新歌舞伎の金字塔。伊豆の修善寺を舞台に、面作り師夜叉王の執念が肉親の情をも凌駕する。まさに芸術原理主義！
9/7 (10人)	第四十九回	サミュエル・ベケット	『ゴドーを待ちながら』	ゴドーを待ち続ける二人の男と、一本の木。繰り返される無意味な会話を笑ううちに、意味の世界を待ち続けているのは彼らだけではないということに気づきます。世界一有名な「不条理演劇」。
11/29	特別企画『本読み会』十周年&第五十回開催記念『本読み会』だよ！全員集合	???	???	